

成果報告書

記入日 2020年 4月 15日

氏名	山下 優介	渡航先国名	大韓民国	所属機関	東京大学 大学院 人文社会系研究科
研究テーマ： 弥生・古墳時代移行期における土器からみた日韓交流の諸相—北部九州以東との交流関係を中心に—					
研究期間： 2019年 4月～ 2020年 3月					
研究成果（概要） 所蔵機関における対象資料の実見観察分析や、文献の収集等の作業を通じて、韓半島における1世紀から3世紀の日本列島に由来をもつ弥生系土器や土師器系土器に関する基礎的なデータを集成し、時・空間的な変遷を明らかにした。その成果に基づいて、弥生時代後期から古墳時代前期における土器からみた日韓交流の変化について、内容や背景に対する考察を深めた。					
研究成果（詳細） 渡航先である大韓民国では、申請時の計画に沿って研究を進めることができた。留學生活の終盤は、韓国国内において新型コロナウイルス感染症への感染者数が増加した影響により、研究活動に支障が生じたため、一部に実施できなかった調査・研究活動があるが、おおむね予定通りの成果が得られた。それらのうちでも、韓国の所蔵機関における対象資料の分析や、韓国で刊行された文献の収集など、長期滞在の利点を活かした研究活動に際して大きな成果をあげることができた。 第一に、研究課題における基礎的な工程である、①韓国内各遺跡出土の弥生土器、弥生系土器、土師器系土器の事例集成および、②西日本の各遺跡出土の、靑島式土器、「楽浪土器」、「三韓土器」などの事例集成、という資料の集成作業の達成が成果としてあげられる。達成の要因の一つには、本研究課題と深く関連するテーマで長く研究を進めてきた、受入研究者である李昌熙助教授の助言や、参考文献の提供等がある。これらは、①や②の作業を円滑に進める際に大きな助けとなった。 第二に、③対象とする土器の実見・観察調査によって得られた成果がある。調査は、日本からは直接足を運びにくい韓国国内の資料所蔵施設で実施した。対象資料である土器は遺跡から膨大に出土するため、網羅的な実見および観察調査の実現には今後も追加調査を行う必要があるが、留學期間中には、研究史のなかで重要な位置づけにある、釜山広域市東萊貝塚から出土した土師器系土器や、釜山広域市福泉洞古墳群から出土した土器類の詳細な観察記録、写真撮影等の調査を実施できた。前者は釜山市立福泉博物館、後者は釜山大学校博物館にて調査をおこなった。また、金海市良洞里古墳群出土遺物について東義大学校博物館で実見観察する機会も得られた。 上述した成果のうち、おもに①と③の調査結果については、留學期間中から既に研究発表や論文として発表するための準備を進めており、2020年度中に「1～3世紀の日本列島系土器の故地からみた日韓交流の変化—大韓民国金海会峴里貝塚出土近江系土器の分析を中心に—」として公表を予定している。					

以下では、公表予定の「1～3世紀の日本列島系土器の故地からみた日韓交流の変化—大韓民国金海会峴里貝塚出土近江系土器の分析を中心に—」の概要を説明する。取り組みの主たる成果は、韓半島における1世紀から3世紀の日本列島に由来をもつ弥生系土器や土師器系土器に関する基礎的なデータを集成・整理することで時・空間的な変遷を具体的に示したことである。そして、その結果に基づき、土器をとおしてみた弥生時代後期から古墳時代前期への日韓交流の変化に関して、その内容や背景の解明を目指した。そのほか、近江地域に系譜をもつとされる弥生系土器については、報告者がこれまで取り組んできた近江地域の弥生土器に関する研究成果を生かして、より詳細な属性分析をおこなった。

対象とする「1～3世紀の日本列島系土器」とは、韓半島で出土する、1世紀から3世紀の日本列島に由来をもつ素焼きの土器、すなわち、弥生系土器や土師器系土器（図1・2）と呼ばれる土器であるが、これらは既に「倭系遺物」などとして注目を集め研究が進められてきた。しかし、これまでは紀元前後よりも古い時期の弥生系土器や、4世紀以降の土師器系土器が中心的に扱われてきたといってもよいだろう。したがって報告者は、この間に挟まれた1世紀から3世紀の日本列島系土器に注目したのである。

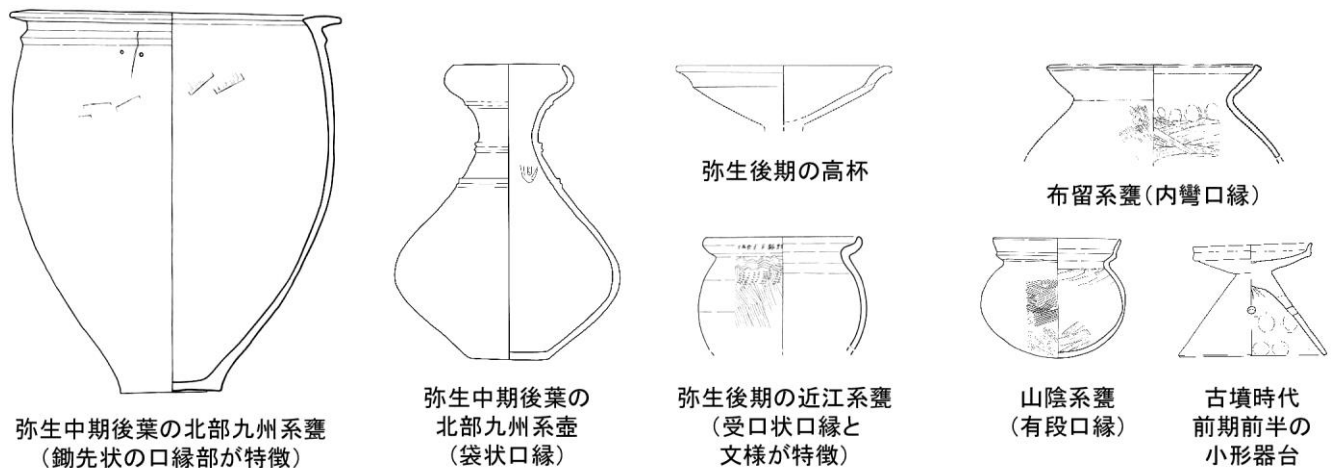


図1 韓半島出土弥生系土器(S=1/6)

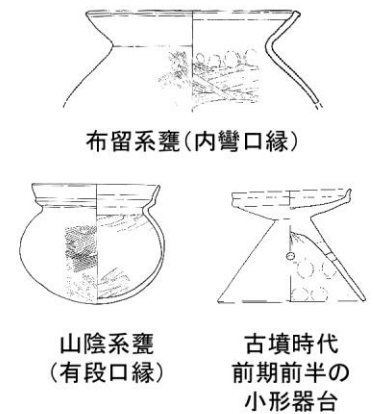


図2 韓半島出土土師器系土器(S=1/6)

先行研究にみられる対象時期の偏重は、対象資料の寡多を直接的に反映するものであるから、検討事例が少ない1～3世紀は、資料そのものが少ないことが予想された。しかし、近年おこなわれた発掘調査や再整理によって新資料が増加していることは間違いなく（寺井誠 2008 など）、網羅的な資料集成に取り組み、変遷を明らかにしようとする取り組みも徐々に可能になってきている（井上主税 2014）。

加えて、日本をフィールドとして研究を進めてきた報告者にとって、日本列島系土器が少なくなる現象こそが日本列島の歴史を明らかにするうえで重要であると考えた。なぜなら、弥生系土器や土師器系土器の少ない1～3世紀は、史料に残る倭国大乱とその前後の時期を含むため、その時期の日韓交流の変遷を理解しようとする試みは、列島内の動向を把握するためにも必要だからである。

以上の問題意識から、本検討では弥生系土器や土師器系土器の基礎的な情報を土台として、1～3世紀の日韓交流の変遷を明らかにすることを目的とした。基礎情報のなかでも、①土器の故地や系統、②土器の器種、そして③出土分布の三点を重要な観点と考え、これらが各時期でどのように変化するか、具体的な資料の提示とともに検討することを目指した。

検討の結果を整理したものが以下である（図3）。なお、成果報告書の「2段階」は、古墳時代前期前半に含まれる時期として扱うこととする。

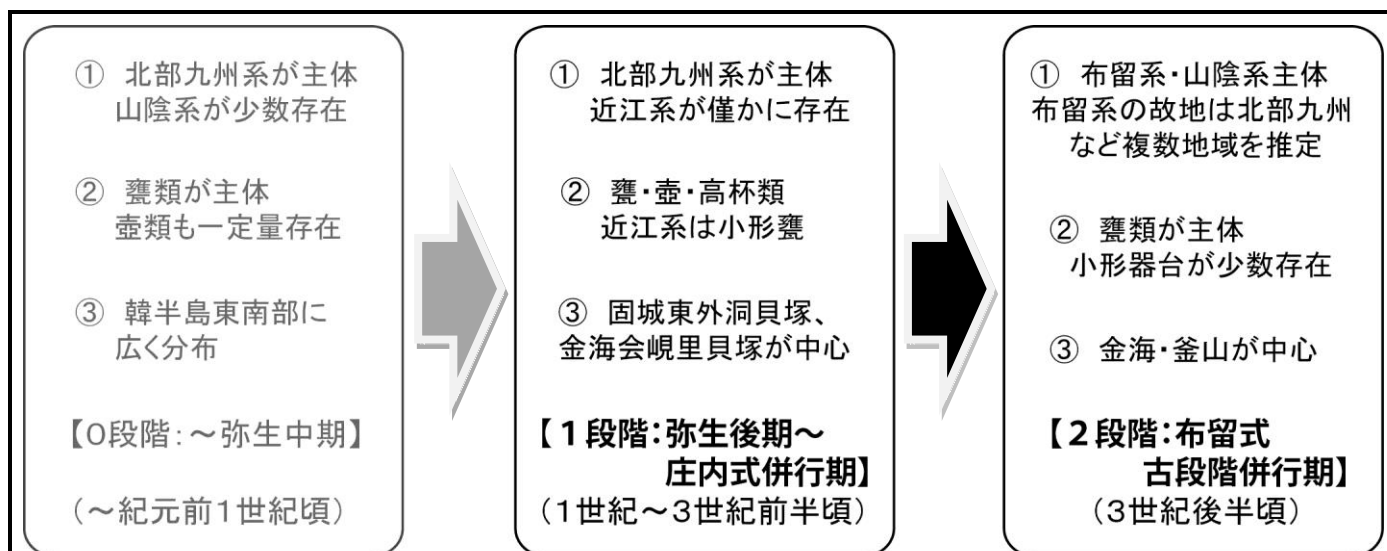


図3 日本列島系土器の変遷

この結果により、1段階から2段階にかけて、山陰系甕の増加と、出土中心地の移動が大きな変化として指摘できる(図4・5)。山陰系土器の増加は過去にも言及されたことがあるが(申敬澈 2001)、その際には、古墳時代になって北部九州地域から畿内へと交渉相手が変わったというそれまでの学説に対し、金官加耶—畿内という一元的なものではない、多元的交流があったとする説の根拠として山陰系土器が示された。その後、金属製品や石製品を含めた分析により、多元的な交流があったにせよ主体は金官加耶と畿内であったと修正された経緯があるが(井上前掲など)、報告者は具体例を示して山陰系が土師器系土器の主体の一つであることを明らかにした。これにより、山陰地域を単なる交流先の一つにとらえることはできず、より大きな役割を与える必要が生じてきたといえる。報告者の検討は十分ではないが、近年、古墳時代における山陰地域の玉製作を重要視する動向もあり、原材料や製作技術を目的とした交流の可能性をあげられるだろう。

出土分布にみられる中心地の移動に関しては、近年指摘される韓半島東南部の政治的な中心地の移動(이창희 2016)と密接に連動している可能性が高く、その問題と合わせて継続的な検討をおこないたい。以上の成果について、すべての内容をここでふれることはできないが、公表に向け準備を進めている。

そのほかに、コミュニケーション能力の向上や、韓国での調査・研究に不可欠な研究者間の信頼関係の構築を成し遂げることができた。これらは、限られた留学期間で達成できるものではなく、今後の継続的な努力によって真に獲得できるものだが、留学を通じて大きなステップアップの機会を得ることができ、飛躍的に進展したことを強調する。前者は、李昌熙助教授の演習授業や、釜山大学校人文大学考古学科の大学院生との日常的な意見交換をとおして達成した。専門的な韓国語への理解を深め、研究の内容等に関して意見を交えることができるようになった。後者については、留学期間中に参加した数々の研究会や各地の博物館へ訪れた際などを通じて多数の研究者と知り合う機会が得られた。今後も韓国の資料を対象に調査・分析を実施する機会が多いことが予想されるため、得られた人的交流関係が重要な意義をもつと考えられる。以上のように、留学では研究課題の進展のみならず、報告者の研究全体により効果をもたらす素晴らしい成果を得ることができた。



図4 1段階の故地と出土の中心地

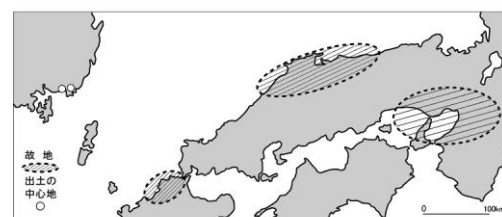


図5 2段階の故地と出土の中心地

留学中の生活・研究でのトピックス

留学期間中は、受入先である釜山大学校人文大学考古学科の先生方や学生たちに、公私にわたってお世話になった。流暢な日本語を話す先生や学生も多く、日本語学習に意欲的に取り組む学生の姿もよく目にした。そのような方々の助けや気遣いのおかげで、生活面で不便なことはほとんどなく、集中して研究課題に取り組むことができた。また、先生方の配慮で同行させていただいた巡検や発掘現場見学などは、報告者だけでは訪れることが困難な多くの場所をみてまわる貴重な経験となった。

釜山大の方たちとともに過ごし、韓国文化にふれる機会が自然と多くなったことで、1年という限られた期間ではあったが、実際に住まなければみえてこない様々な部分を見ることができた。生活では日韓の距離的な近さを実感する場面が多かった一方で、最新の研究に関しては共有が不十分なことが多々あった。両国の研究者が発信方法を工夫するだけで改善できる部分であるため、一層の努力と交流の必要性を痛感した。



左:蔚山市盤亀台岩刻画、中央:盤亀台岩刻画の説明を受ける報告者
右上・右下:韓国料理を釜山大学校考古学科の学生と

今後の社会貢献

今後、様々な場面において日韓交流の活性化の一端を担うことができたならば、社会貢献ができたといえるだろう。具体的な交流のあり方としては、第一に、学問的な交流がある。留学期間中に韓国でよく耳にしたが、以前に比べて考古学を学ぶために韓国へ留学する日本人学生が減っているという。この問題に対しては、報告者が留学したことで直接的に交流を活性化できたといえる。韓国をフィールドとした研究はこれからも継続する計画であるため、今後も交流の推進が可能である。日本へ渡ってくる研究者についても、報告者の留学が契機となる場合が少なからずあると考えられる。留学中に韓国の研究者と交わした議論は常に活気があり、日本の考古学研究に対する関心の高さを実感した。

第二は、一般の人びとの交流である。韓国は隣国であるが交流の長さや深さ、そして日本の歴史におけるその交流関係の重要性に関心がない人もいるように思える。日用品である土器を対象とした報告者の研究により、2000年前の昔から多くの人が日常的に海を越えて行き交い、互いの土地で暮らした事実を知ってもらうことができる。その成果をきっかけに、韓半島をより身近に感じ、より深く理解しようとしてもらった時、現在の日韓交流の活性化を導いたといえる。日本列島と韓半島の関係性を良好なものにするためには、古代から現代までの、交流関係の歴史を理解し合う心がけが不可欠である。研究を通じてこのような相互理解の一端を担うことが、留学した者の務めである。